● IASAI 研究トピック

「ストリーミング・ヘリテージ 2021 autumn」作品展示、トーク実施報告

中京大学工学部 メディア工学科
上芝 智裕

イベント概要

名称：ストリーミング・ヘリテージ 2021 autumn　－台地と海のあいだ
会期：2021 年 11 月 12 日（金）～ 28 日（日）＊会期中金土日祝に開催
会場：名古屋城エリア（名古屋能楽堂・四間道）、納屋橋エリア、熱田・宮の渡しエリア

ストリーミング・ヘリテージとは、名古屋城から堀川沿いに熱田・宮の渡しまで、文化資源や観光資源をひとつづきに結ぶ [stream] を舞台にし、現代アートによって名古屋の歴史・文化遺産 [heritage] にハイライトを当てるイベントです。今回で第 2 回となるこのイベントは日本博に関連したもので、なごや日本博事業実行委員会によって主催されました。

筆者は四間道にある伊藤家住宅においてグループによる作品展示を行い、名古屋市能楽堂におけるトークに登壇させていただきました。

作品展示

会場の伊藤家住宅（愛知県指定文化財）は、名古屋城の西に位置し、主屋と 4 棟の土蔵からなり、堀川の水運を利用して家業を営んだ商家です。名古屋城下町の形成にかかわる堀川との深い関連があり、上級商家建築として貴重な建物として残されています。

我々のグループはこの会場にコンピュータによる作品制作からインスピレーションを得た紙の作品を 3 点展示しました。このうちの「note」という作品（写真）は音を視覚的な文字にあらわし小口に印刷した紙の 1 枚を“1 サンプル”として並べ、コンピュータ内部で音やグラフィックがデータ化されている様を物理的に表現した作品です。

作品を制作しているグループ名「softpad」はチャールズ＆レイ・イームズがデザインした椅子の名前に由来しています。我々の作品は、デザイン史上マスターピースと呼ばれるプロダクトを同じ場所に展示することで、空間の視覚的効果を調和させ、作品のコンセプトやメッセージを補完したり強調したりすることが特徴です。

今回の展示では、古民家を利活用した会場および展覧会のコンセプトに基づき、照明に北欧のデザイナー、オイヴィン・スラートの「パテラ」を選びました。

フィボナッチ数列に基づいた螺旋構造が特徴のこの照明を、環境保全が必要な地球の気象状況を可視化しているモデルと見立て、下に置かれた作品 note もそれが置かれた環境を可視化するものであることを暗示しています。実際にたくさんの紙が並べられた作品の上辺は部分的に大きく波打っており、この古民家の畳と床下の構造が劣化・変形していることを結果的に可視化するものになりました。

パテラの明かりによって強調された、この作品のカーブによって、このままでは失われてゆく名古屋の文化遺産の静かな声を表現し、これらの遺産が次世代に受け継がれるべきものであることを希望するメッセージとしました。

同じ伊藤家では 2025 年大阪・関西万博日本館の基本構想策定クリエイターでもある市原えつこ氏の作品も展示されましたが、伊藤家住宅の建物自体が絶妙な媒介をなし、対照的な作風の作品たちをうまく接続してくれていたという声が多く聞かれました。

トーク

11 月 20 日（土）、名古屋能楽堂会議室でリレートークが実施され、筆者も本展ディレクターでメディア芸術祭審査員を歴任されている秋庭史典氏と対談しました。

話題は自己紹介も兼ねて 1991 年名古屋 ICA における dumbtype パフォーマンス公演の記憶から始まり、本学メディア系学科設立以降の活動を振り返りながら、秋庭氏の質問に答える形で進められました。特に本展覧会のディレクター陣やアドバイザーはメディアアートやデザイン教育に携わるアーティストや研究者で構成されており、対談の内容も下記に示した名古屋東海地区におけるメディアアートおよびデザインに関連した教育普及の歩みを辿るものとなりました。

1989	デザイン都市宣言、世界デザイン会議（ICSID）、世界デザイン博覧会
1989 － 1997	名古屋国際ビエンナーレ（ARTEC）
1999 － 2003	art port
1999 － 2009	MEDIASELECT
2002	電子芸術国際会議（ISEA）
2003	世界グラフィックデザイン会議・名古屋（Icograda）
2005	愛知万博
2008	ユネスコ創造都市への加盟
2021	ストリーミング・ヘリテージ

（以上　本展覧会 web より一部加筆）

本展覧会アドバイザーでもある茂登山清文先生は名古屋国際ビエンナーレ (ARTEC) の運営以前からご活躍され、上記電子芸術国際会議（ISEA）や 2003 年の MEDIASELECT 出展の際だけではなく、その後も愛知児童総合センターにおける「汗かくメディア」のプロジェクトでもお世話になりました。

また本学メディア工学科を退官された幸村真佐男先生の 2019 年度メディア芸術祭功労賞受賞の話題に触れ、その功績を讃えるとともに対談を締めくくりました。

1 時間という枠の中で、本学カール・ストーン教授や、本企画パフォーマンスで参加の IAMAS 教授陣による岐阜、名古屋圏の Max/MSP コミュニティの貢献について触れる時間がなかったのが心残りでした。しかしながら、今回の対談により、日本のメディアアートおよびデザイン実践、研究における名古屋での取り組みおよび、本学部、学科の貢献は再確認できたのではないかと思う次第です。

伊藤家住宅での展示の様子：作品「note」